

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名: 農学部/教授

氏 名: 寺岡行雄

授業科目名	国際森林論
研修先(国・地域) 滞在地	ロッテンブルク林業大学(ドイツ・バーデンビュルテンベルグ州)
研修期間	2017年9月16日～9月26日
<p>〔研修の成果〕</p> <p>本科目は、環境に配慮した先導的な取組で有名なドイツの森林・林業を見学し、ロッテンブルク林業大学教員らによる講義と実習を受けることにより、森林・林業および森林観の多様性を学び、異文化を理解する素養および国際的視野を身につけることを目的としている。</p> <p>研修参加学生への事前学習として、平成29年4月18日と5月10日に予定されている研修内容を説明し、参加の意思確認を行った。同時に、航空券確保、保護者からの受講承諾書、学生教育研究災害傷害保険加入確認等の書類作成についてメール等で学生と密な連絡を行い、8月2日に旅程の確認と必要な書類を確保した。8月25日にドイツの森林・林業を中心として学生が学習内容を発表する事前学習を行った。また、同日学研災の海学付帯保険説明を受け、加入手続きを行った。農学部学務課の手配により、研修期間中の緊急連絡網の体制(資料1)が作られた。また、使用航空便はもちろん渡航中の学生の宿泊ホテル移動経路を事前に報告させて、インターネット利用ができるよう海外無線WiFiを準備させたことにより、移動中の所在確認を常に行った。</p> <p>研修プログラム(資料2)はロッテンブルク林業大学教員によって作成された。研修は9月17日のTrippstadt市有林にある持続可能性研修ハウスに始まり、9月18日にナラ林の将来木施業の実際、高品質ナラ材をワイン樽に加工するための製材工場を見学した。9月19日には再生可能エネルギー運営企業のJUWI社を訪問し、主として風力発電事業についての説明を受けた。市有林を管理している地元森林官から、風車が3基設置されている市有林経営についての説明を受けた。風車は高さが170mであり、風力発電による地域への収入と景観との関係について議論を行った。夜に、ロッテンブルク市に移動し、9月20日には大学で木質バイオマスエネルギーについての講義を受け、近郊の伐採現場で伐倒から造材まで見学した。同時に、移動式チップパーによる末木枝条のチップングと輸送を見学し、木質燃料を販売・流通させているSCHOTTER TOEUFEL社のチップ貯蔵ヤードを訪問した。日本では発達していない燃料チップ流通業の事例を学習することができた。9月21日には森林土壌調査と評価について、大学での講義と演習林での実習で学習した。午後からはチュービンゲンに移動し、州森林局の販売担当者から森林局の管轄する木材販売についての説明を受けた。次に林業機械メーカー担当者から、ヨーロッパでの林業機械を管理するシステムについて講義を受けた。夕方には隣接する修道院の歴史について説明を受けた。9月22日にはシュバルツバルド南部へ移動し、トウヒに対する甲虫被害が拡大しており、予防的防除のため伐採し、タワーヤードにより山岳地での木材生産を行っている現場を見学した。また、州森林局の販売担当者から、販売される木材の種類や価格などについて、現場での説明を受けた。9月23日には、Bad Bildbad市にある筏による木材の河川送流博物館を見学した。午後からは、キャンピーウオークという林冠歩道を歩き、地上高40mの半木製タワーに登った。普段は見ない上からの樹木観察は貴重な体験となった。夜にはカイザー学長、ハイン教授も参加した食事会を開催し、懇親を深めた。9月24日には、シュツットガルト市有林を森林官の案内で見学し、木材生産を目的としない保全型森林経営について学習した。</p> <p>本科目でのドイツ滞在中の研修は、ロッテンブルク林業大学の教員・スタッフにより計画・実施されている。現地での説明は基本的に英語であり、日本人教員の補助的な説明はあったものの、学生は英語で理解するよう努力をしていた。日本への留学経験のあるドイツ人学生や卒業生と岩手大学から9月末まで留学していた学生も同行することが多く、彼らの支援により学習効果を高めることができた。日本からは本学の外、岩手大学、岐阜県立森林文化アカデミー(以上2校はMoU協定校)、宇都宮大学、信州大学、愛媛大学、宮崎大学の教職員・学生の51名で構成され、他大学の学生や教員との交流も大きな刺激となった。学生の報告書やアンケート結果(資料3)にも見られるように、研修内容への興味、理解度は高く、今後の勉学意欲向上へ大きく寄与するものと判断される。</p> <p>渡航費を除き、宿泊費、食費、施設入場料等として、学生から徴収した金額は285ユーロであった。ドイツ側の配慮もあり、宿泊は修道院に併設されたドミトリーやユースホステルであり、低廉で快適な環境を得ることができた。大学からの渡航費支援(10万円)により航空券代の大部分をカバーできたこと、また、農学部グローバル人材育成経費により一人あたり100ユーロの借り上げバス経費を負担いただいたことから、本研修への参加学生の経済的負担がかなり軽減されたことに感謝したい。</p> <p>地域貢献型としての取り組みは、事前学習においてドイツ及びEUに関して学習し、日本との対比を行った。また、研修中は岩手や長野、愛媛の学生や教員と交流し鹿児島地域の地域性を再認識することができた。事後学習としての成果報告会を10月30日に開催し、ドイツ研修で学んだ内容、経験を今後どのように生かすか報告された。語学の問題や専門的知識や経験が不足していることを理解した学生も多く、本件州が大きな刺激となり、在学中の勉学や将来の専門職としての活躍に役に立つものと思われる。</p>	

〔今後の課題〕

本研修旅行は今年で6回目となる。2012年に8名、2013年に9名、2014年に11名、2015年に16名、2016年に14名、2017年に15名の73名の学生参加実績となっている。また、2013年からは岩手大学等協定校を中心とした合同開催としており、この3年間は40から50名の参加人数となっている。本学からの渡航費支援を頂く関係上、JASSOの短期派遣への応募は見送った。今後、支援経費額の変更等があれば、JASSOへの応募も再開することから、その際にはご指導とご支援をお願いしたい。

外務省旅レジに登録し、ドイツ大使館や領事館からの情報提供(デモ情報など)が頻繁にあり、大変役立った。一方、アイファインダーは幸いにも使うことがなかったためであるが、効果がわからなかった。学生に無線WiFiを携帯させておけば直接の連絡は可能であり、アイファインダーの必要性は疑問である。

また、学研災の海学付帯保険は、なぜ保険屋からの直接の説明が必要なのか理解できない。東京海上の保険は空港でも加入可能であり、多くの学生の日程調整の手間を考えると、生協等で手続きができる海外旅行保険に加入させる方が良いと思われる(多少安いのが、我々や学生のコストが考慮されていない)。また、保険会社が同じでなければならない理由は見当たらないので、海外保険の加入は義務づけるだけで良いと思われる。

※)本報告書の文中にある資料等の掲載は割愛致しました。